日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)

文は信なり

No.31　晩秋号　『特集・聖書と出会って』

発行責任者
本部代表・三浦喜代子
JCP 事務局
〒131-0043
墨田区立花 4-6-13
TEL&FAX 03-3616-8621
郵便振替 00170-0-61838
HP:http://jcp.daa.jp

聖書が日本語になるまで

十六世紀の初め、マルティン・ルターは「聖書のみ！」と叫んで、宗教改革の偉業に挑みました。ルターは、保護先のワルトブルグ城の一室で、誰でも読めるようにドイツ語の新約聖書を翻訳しました。それまではラテン語しかなく、聖職者以外は読めなかったのです。

最初の英語聖書はルターより早く、十四世紀の終わりにジョン・ウィックリフの翻訳で誕生しました。

もともと、旧約聖書はヘブル語（一部はアラム語）、新約聖書はギリシャ語（コイネーギリシ語）で書かれているとは、よく知られているところです。これでは一般のキリスト者には読めません。識字率の問題もあったでしょうが、現在のように個人個人が聖書を持ち、いつでもどこでも自分の国の言葉で自由に読めるようになるまでには、多くの歳月と多くの人々の貢献があったのです。

聖書には原本はなく、すべて写本です。特別な人たちが一字一句丹念に、パピルス、後には耐久性のある羊、やぎ、子牛の皮紙に書きつけていきました。写本の中でも「死海写本」はエピソードとともに有名です。

その後はグーテンベルグの印刷技術の発明により印刷聖書ができ飛躍的に普及しました。

さて、日本語の聖書翻訳はどのように進められたのでしょうか。

「ハジマリニカシコイモノゴザル」の一文は多くの方が記憶しておられるでしょう。これこそ、日本語初の聖書、ギュツラフ訳「約翰福音之傳」（ヨハネ福音書）の冒頭です。

ドイツ人宣教師ギュツラフは日ごろから未だ見ぬ日本人に聖書を知らせたいと願っていましたところ、マカオに滞在中に、三人の日本人漂流船員、岩吉、久吉、音吉に出会ったのです。岩吉たちは「宝順丸」で尾張米を江戸に運搬中に遠州灘で嵐に遭って遭難し、アメリカ西海岸に漂着、紆余曲折を経て、英国の商人に助けられ、マカオから日本に送還される途中でした。ギュツラフはこの出会いを神の導きと確信し、三人の助けを得て聖書翻訳に取り掛かりました。

この間の様子は、三浦綾子の小説「海嶺」に劇的に描かれています。この時の「ヨハネ伝」と「ヨハネの書簡」は全文カタカナが使われました。時は一八三五年～六年のことで、明治維新まで三〇年余り前、キリシタン禁制中のことでした。

幕府が開国をすると同時にアメリカからの宣教師ヘボン、ブラウン、ゴーブルの三人がすぐに翻訳を始めました。ヘボンが考案したローマ字の聖書が完成しました。

（三浦喜代子記・参考資料多数）

目次

P1　「聖書が日本語になるまで」
P2　『特集　聖書と出会って』
　青葉亜樹子　荒井文　安東奈穂美
P3　遠藤幸冶　亀井正之　駒田　隆
P4　佐藤晶子　志田雅美　島本耀子
P5　土筆文香　富岡國廣　西山純子
P6　長谷川和子　槇　尚子　三浦喜代子
P7　皆川江里子　山本披露武　横山美佐
P8　あかし作品集「春夏秋冬」の紹介
　余滴　・　編集後記

もう、国語の教科書ではない

青葉亜樹子

小学二年生の時から教会学校に通っていた。お説教の一時間前から『学びの会』があって、みことばを覚えたり聖書を読んだりしていた。そのたびにもらえるシールやカードが貯まっていくのがとてもうれしかった。

先生から聖書を持つように薦められた。いつもお隣のお姉さんに見せてもらっていたからだ。

私は、母にねだって新約聖書を手に入れた。しかし、薦められたから、みんなが持っているから、教会で使うからという理由だけの聖書は、私にとっては取り澄ました国語の教科書のようだった。

三年後、長い入院生活の後に奇跡的に教会へ行くことが出来たとき、自分の命がここにあることに気がついてうれしさと感謝で心が溢れた。

退院した年のクリスマスに、旧約の付いた大きな聖書を母に買ってもらった。その時から、もう聖書は国語の教科書ではなくなった。

それからの辛い治療も、悲しいときも苦しいときも、いつもともに闘い励ましてくれる、心強い友となった。

聖書の生きるみことばは、私のいのちの源となって今も私を支え続けてくれる。

やっぱり聖書

荒井　文

学生時代、読書は大きらいでした。学校の宿題で仕方なく聖書を読んでいました。毎年夏休みにはヨブ記通読が学校の課題だったのです。

救われる前、そのヨブ記を読みました。神様はひどい、信じているヨブを何であれほどまでにいじめるの、何が神の愛かと思いました。つらい試練のなかでヨブと自分を重ねる事もありました。

やがて、一粒の麦となった母のことを知り、救われました。神様を信じ続けていると、神様が必ず助けてくださること、同じ苦しみの中でも知らない間に神様が助けてくださることに気がつきました。ヨブが神様に従う気持ちになったことが分かったのです。

『神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます』(Ｉコリント一〇・13)

目のことを思うと、いつ聖書が読めなくなりあかし文章が書けなくなるかもわかりません。それでも皆様の会に参加させていただきたいと願っています。わかっても分からなくてもやっぱり聖書は生きる力です。

子供心に求めたものは

安東奈穂美

昭和三十年代半ば、大阪市で生まれ育った。両親と一歳年下の弟との四人家族だった。幼い頃は、寝る前に父がよく昔話をしてくれた。童謡のレコードは母がかけていたのだろうか。質素な暮らしの中にも、温かいものが満ちていた。

近所の子供達は近くの仏教系幼稚園に通っていた。母は、ある日、その園の教師が子供を引率する様子を見て不安を覚えたらしく、私を隣町の教会附属幼稚園に入れた。私はすぐに主の祈りを覚え、家でも幼児さんびかを歌っていた。卒園記念に新約聖書を贈られた。とても誇らしい気持ちだった。しかし、字は読めても一人で読み進めることはできなかった。

母は子どもに手を上げる人で、頬を平手で打たれたこともある。弟にも同様だったと思うが、(母は私より弟が可愛いのだ) とずっと感じていた。

また、両親共に煙草を吸い、日曜日にはパチンコをしたり競馬中継を見たりしていた。思春期が近づくと、そのような家庭の雰囲気に胸の奥が詰まるような気持ちを抱き始めた。

中学生になって初めて教会に行った。いつも初めのほうしか読めなかった聖書のその先の話を聞いた。真実で聖なるものとの出会い、新たな道の始まりであった。

青春のむなしさの中で　遠藤幸治

母方の叔父に誘われてはじめて教会の門をくぐった日は覚えているが、聖書を真剣に読もうと思ったのはいつからだろうか。

一つのきっかけがあった。

五七年前の秋も深まる頃であった。当時は東京タワーが建設中であったが、私は都心のある印刷会社に住み込みで働いていた。

上司が「この仕事は今夜中に仕上げておくように」と言いつけて帰ってしまった。一人残された私は夜遅くまで印刷機を相手に仕事をしていた。将来への夢も希望も見えず、むなしい思いを抱いていた。

ようやく仕事を終えて、活字の整然と並ぶ部屋の片隅でしばらくぼんやりと夜空を眺めていた。窓辺から月の光がこうこうと差し込み、こおろぎの鳴き声が寂しさを募らせた。

背後から私を抱きしめるように「わたしの子よ」とやさしく声を掛けるお方の気配を感じた。神様の愛を強烈に覚えていつまでも涙が止まらなかった。この瞬間を今でも忘れることができない。

あの時以来、聖書の言葉がみ身近に感じられるようになった。友無き者の友になってくださった主に感謝している。

キリストを追い続けて　亀井正之

いやでも聖書に向き合わなければならない時が来た。中学三年生の春であった。それまで私は頑固に予習復習もしないスタイルを貫こうとしてきたが、その為クラスの最下位辺にあえいでいたのだ。

ちょうどそんな時、親しくしていた仲間たちと教会に行こうということになった。

大きな教会であった。案内されて、一番前の席に、四つのいがぐり頭と黒い制服制帽が並んだ。私には緊張と少しの期待があった。講壇上の牧師からの紹介で会衆の大きな拍手をもらったようであったが、なぜなのか理解できなかった。もちろんその時の説教は全く理解不能だったし覚えてもいない。が、不思議なことに講壇の両脇に掛かっていた言葉のひとつが記憶に残った。その言葉が人生終盤の今に至るまで、私がキリストの跡を追い続けるもとになったと思う。

『明日のことを思ひ煩ふな……一日の苦労は一日にて足れり』（マタイ六・34）

明日のことを思い煩わないことはその時分の理想であった。（まあ今でもだが）

その後、その教会に通い始めたが、私がその言葉の意味を真に知ったのはそれから大分経ってからのことであった。

マルクスからキリストへ　駒田　隆

一九四五年八月十五日、今までの価値観が一変しました。鬼と教えられていたアメリカが救世主に変ってしまったのです。多感な旧制中学の四年生だったわたしは、何を信じればいいのか迷ってしまいました。

そしてわたしは、戦争中も信念を変えなかったマルキストに圧倒され、彼らの信じていたマルキシズムに走ったのです。『資本論』や唯物弁証法の解説書を夢中で読みました。夜は、公開されていた旧制水戸高校の梅本教授のマルクス経済学講座に通いました。

職場では、一週間のストライキも計画していたのです。しかし、その反面、多くの矛盾を感じました。何が善であり、悪であるのか、その判断基準に迷いが生じ、悩みました。

そんなわたしを見かねて、一人の職場の先輩が、キリスト教会の扉を叩くことを勧めてくれたのです。その扉は重い扉でした。でも、何とかその扉を開いたとき、迎えてくれた日基水戸教会の鈴木浜牧師は、無茶苦茶なわたしの質問にも、いやな顔一つせずに親切に答えてくれたのです。

すべてを受け入れ、キリストへ導いてくれた、その大きな愛こそ、わたしの信仰の基になり、今に続く信仰に繋がりました。

寝る前の聖書

佐藤晋明子

私の実家には聖書もなく教会へ行くこともなかった。中学生になる少し前に、母が私と妹に近所の書店で少年少女向けの五十巻程の世界名作文学全集を買ってくれた。

うれしくて日曜日の朝、朝食後はいつもその本を読んだ。

書店からの帰り道に母が、「聖書は世界のベストセラーよ」と言ったことはすっかり忘れていた。

社会に出てしばらく経った頃、私の心の中にはまだ学生時代の甘えが強く残っていたためか、複雑にからみ合った人間関係の糸を解きほぐすことができず、次第に自分の居場所を失い、自暴自棄になっていった。

そのような私を母の友人が心配して、詩篇付きの新約聖書を届けてくださり、母が私の机の引き出しに入れておいてくれた。

「寝る前に少しずつでもいいから読みなさい」と言ってくれた。

母の優しさがうれしく、私はその聖書を毎晩床の中で読んだ。それが私の聖書との初めての出会いだった。

この証しを書いていて、母と、聖書を届けてくれた母の友人の優しさを改めて知ることができ、心からうれしく、感謝している。

神さまからのラブレター

志田雅美

おそらく、私は本当の意味で誰からも愛されてこなかったと思います。もちろん、両親は善良で、私は何不自由なく育てられました。でも、温かいぬくもりや大きな愛に包まれた記憶はほとんどありません。

友人も同じです。大切にされるためには、常に彼らに都合よくふるまう必要がありました。そして、悲しいことに夫も例外ではありませんでした。

私にとって愛は、ショーケースに並ぶ商品のようなものでした。より多く高価な愛を得るために、どれだけ心を払ってきたか知れません。それが虚しいことだとわかっていても、寂しさには勝てませんでした。

けれど、神さまに出会って私は変わりました。イエスさまの十字架の死が、私のためだったと知ったからです。初めて聖書を手にした時の胸の高鳴りは今でも忘れられません。

何気なく開いたある一ページのみことばが、私に語りかけているように感じました。

以来、そのみことばを胸に私は生きています。もはや、寂しさや虚しさはありません。

『わたしの目にあなたは値高く、尊く、わたしはあなたを愛している』

（イザヤ四三章４節）

旧約聖書だったら

島本耀子

十二歳ころのある日、父の書棚に小さな本を見つけた。背表紙には「聖書」とある。だが、ずらりと並ぶカタカナの人名にたちまち興味を失い、聖書はそのまま閉じられた。

いつか、『叩けよさらば開かれん』『人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ』等々の耳慣れない言葉が家の中に入ってきた。兄は、頬を打たれるのは痛いからいやだと笑った。

娘がキリスト教系の学校に入り、私も初めて聖書を開いたときは、五十歳近くだった。キリ研講師である校長先生が説く聖書のみ言葉は、求めて行った私の心に深く沁みた。

そして、あれは聖書のみ言葉だったのだと、気が付いた。今は所在不明の聖書だが、姉に聞くと新約だけの聖書だったという。あれが旧約聖書だったら、「光あれ」につられて、私はあの聖書を読んでいたかもしれない。「光」の文字にひかれる光へんの名の私なのだから。

六人きょうだいの内、受洗したのは姉と私の二人だけである。神様は様々な機会を与えて、私を救いに入れてくださった。

聖書とみ言葉をもたらしたのは父だが、周囲への遠慮があったのか、受洗には至らなかった。しかし私たちは、父もイエス・キリストを信じて召されたに違いないと信じている。

絶望と不安の中で

土筆文香

なぜこんなことになったのだろう……。

私は点滴を受けながら、病院のベッドでずっと泣いていました。

十日前に二人目の子どもを無事出産したのですが、退院後喘息の発作が起きてどんどん悪化していきました。食事もとれなくなったので病院へ行くと、すぐ入院と言われました。いのちの危険があったのです。

元気なら、翌日は主人の実家に預けている三歳の長男と会えるはずでした。生まれたばかりの長女は両親に預けたままです。子どもたちに会いたくて胸が張り裂けそうでした。

大発作は治まったものの発作がいつまでも続きました。このまま治らないのではと不安になり、涙が止まらなくなりました。

すがるような気持で聖書を読むと、み言葉が心にとびこんできました。

『恐れないで、ただ信じていなさい（マルコ五・36）』

初めて聖書の言葉が自分に向けて語られていると感じて「不信仰な私を赦して下さい。たとえ喘息が癒されなくても神様がよくしてくださると信じます」と、心から祈りました。

不思議に翌日発作が治まり、数日後退院して子どもたちを抱きしめることができました。

聖書はいのちの言葉

富岡國廣

「罪ある者として生を受け」という聖書の言葉を知らない時、私は親を敬わない者、神を神と思わない者であった。

いやそれ以上に、神を憎む者でさえあった。

ある宣教師から神の名を聞かされたとき、頭に血がのぼって「そんなもの必要ない！」と強く拒絶したことがあった。

それは結局自分を神とするような傲慢さがあったのだ。自分は有能で、誰の教えを受けなくても生きる術を心得ていると考えていたのだ。

しかしウツが原因で教会に行くようになり、三〇歳を少し出た時期に洗礼を受けた。

それから長い年月を経たけれど、成長がなく、神もキリストの十字架もそれ程尊ばなかった。しかしある時真剣な祈りをしたことをきっかけに、自分が無に等しい者、救われる価値の全くない者であることに気づかされた。

故に、あの十字架こそ神の救いの唯一の道であることを、明確に、心の内を照らす光によって知らされた。それはどんな言葉をもってしても表わせない輝きに満ちていた。

それ以来、いのちの言葉としての聖書の教えが、日々私の心を捕えて止まない。

青春

西山純子

「あなたの歌う声にとても似合う所がある。いっしょに行ってみない？」と中学三年の私に声をかけた人がいた。転校して来て間もなかった私は、優しい友の誘いに「なんだろう？」と不思議な期待感でその日を待った。

約束の朝は始業式の次の日曜日だった。

私たちは古びた西洋建築の、屋根の上の十字架に惹かれて玄関に立った。

「教会学校の生徒さんですね」と中年の婦人に声をかけられ案内されると、すでに来ていた同年くらいの男女生徒十数名が笑顔で私たちを迎えてくれた。

友の言った通り讃美歌の音色と響き、詩の言葉の清々しい思いが私の心をいっぱいにした。いただいた聖書は淡い空色に緑が混じった縦長の厚さ二センチほどのもので、つるつるした手触りの表紙だった。そこには新約聖書と記されていた。

『あなたがたは世の光である』（マタイ五章14節）は初めて教えていただいた聖句だ。

聖書との出会いは、その後の人生にどのくらい大きな影響を与えたか。

それは神のみがご存知で、誘ってくれた友はもちろん、私は何一つ知らずに教会生活の歩みに連なって行ったのだ。

希望の灯

長谷川和子

山村で育った私は教会の存在を十七歳まで知らなかった。

ある日ルーテルアワー通信講座が突然届いた。学ぶうちに聖書を知り、終了後紹介された十日町教会で十九歳のとき洗礼を受けた。

長老のM氏から「福音書を三回読むと良い」と勧められ、カタカナ語の名前が多く読みにくかったが、四福音書を夢中で読んだ。同じことが繰り返し書いてあることが不思議であり、十字架の意味すら理解出来ないでいた。

我家は父母妹弟の五人家族、父は優しかったが酒に呑まれると豹変。その姿に幼い時から戸惑い、恐怖の日々であった。母は父の暴行に耐え〈人様に迷惑をかけないこと〉が躾の一つであった。聖書を読み進めていくうちに『わたしは山に向かって目をあげる。わが助けはどこから来るであろうか』詩編一二一の言葉に釘づけになった。それは常日頃西の嶺を見上げては、山の向こうから誰か助けに来てくれないかと切実に思っていたのでこのみ言葉は私の叫びでもあった。『わざわいを恐れません／私は耐え忍んで主を待ち望んだ』。

詩編の言葉は私の心境そのもの、大いに慰められたのである。信仰歴五〇年、病の連続であったが『あなたのみ言葉はわが足の灯』に導かれ、今日まで生かされてきたのだと思う。

暗唱聖句

槇　尚子

自分用の聖書を与えられたのは小学校一年生だった。戦後のまだ紙が良くないころの少し分厚な新約聖書だった。絵表紙が付いていた。五四年度版である。

当時は日曜学校と言ったが、そこで先生が開かせるたびに赤鉛筆で線を引くのが楽しみだった。人より多く赤く染まるのが誇らしかった。まだ低学年のこと、意味など分からなかったが、教会と聖書はいつもセットだった。ある時、神学生だった若い先生が、「聖書には大事な言葉が沢山あるけどこれが一番です」と教えてくれたのがヨハネ三・16だった。御子、賜わる、愛する、永遠の命、など意味は全く分からなかったが、先生はこのみ言葉を暗記させた。次の週からどれだけ暗記できたかみんなの前で言わせた。また文語の言葉でこれを歌にしたものを教えてくれた。歌にすると、もう間違えようはずはなかった。声張り上げて歌う私たちを先生はうれしそうに見ていた。

文語訳、口語訳、新共同訳、と聖書は少しずつ形を変えてきている。次の世代に向けてすでに改訳が進められているとか。受洗の時もらった皮の小さな聖書の表紙には「汝、之によりて勝て」とのサインがある。

六〇年前の聖書

三浦喜代子

中学生になったばかりの頃、三つ違いの妹が手のひらに乗るおもちゃのような本を見せた。真っ赤な表紙だった。気になった。

「日曜学校で、もらったの。いいでしょう」

妹は見せびらかすようにひらひらさせ、「教会へ行けばもらえるよ」とも言った。私は腹立たしくなって「ふん、いるもんか」と強がった。が、内心では、ほしい、読んでみたいと叫んでいた。表紙には黒い字で「ヨハネ傳」とあった。

中学三年生の夏に、妹は「姉ちゃん、教会へ行ってみたら」と言った。一度も行きたいと思ったことはなかったが、今度は逆らわなかった。教えられた道をたどって、初めて教会の礼拝に行った。そのまま通い続け、四か月後のクリスマスには洗礼を受けた。

教会からお祝いにと、ぶ厚い聖書をいただいた。うれしかった。学者が持つような立派な本だった。漆黒の表紙に「舊新約聖書」と横書きに並んだ銀色の文字が輝いて見えた。

おそるおそる開き『大初に神天地を造り給へり』の一行を厳かな気持ちで読んだ。文語体だったので読みにくかった。

ここから幼く弱い信仰生活が始まった。今日まで半世紀以上も続くとは　思わなかった。

あれから三〇年…　皆川江里子

父の転勤等で転校を繰り返し、小六になるときに横浜に転居してきました。しばらくして、父が毎朝会う同じマンションの素敵なご夫妻に「お嬢さん方、教会にいらっしゃいませんか」と誘われました。転入生の私は少し異質で学校になじめず、中学を受験することにしたのです。そのため、入試の終わった直後に初めて近くの日本キリスト教団清水ヶ丘教会の教会学校に行ってみました。

そのとき「タラントのたとえ」を学びました。主人の留守中、五タラント・二タラント（お金の単位）を預けられたものは倍にして主人に返して褒められ、一タラント預けられたものは隠して守っておいたところ、怠惰だとしかられてしまうのです。減らしていないのになぜ？「禁欲」のイメージだったキリスト教は、意外にも自分の能力を活かしたら、神様に喜ばれることがわかりました。

入学したキリスト教主義学校は、清水ヶ丘教会の牧師や信徒の関わりが深く、不思議な感じがしました。

三〇年あまり経った今も、「自分の賜物を活かしなさい」「誘ってくれたご夫妻のようにキリストの香りを放つものとなりなさい」と、神様は私に語りかけられます。

素晴らしい本に出会えて　山本披露武

三浦綾子の小説『塩狩峠』を読んで感動した私は、初めて聖書を読んでみようと思うようになりました。見知らぬ人たちの命を守るために自分の命までも投げ出してしまうというその小説の主人公、永野信夫という人の生き方考え方が、聖書の教えに基づくものなのかどうかを知りたいと思ったからです。

が、いきなり読んでも理解できないだろうと思い、まず矢内原忠雄の『聖書講義』を読むことにしました。しかし、いざ読んでみると常識では考えられないようなことがあまりに多くがっかりしてしまいました。読むのをやめようと思ったこともありました。

それでもあきらめずに読み続けている内に私の受け止め方に変化が生じ、矢内原先生のように聖書に書かれていることを素直に受け入れることができたらどんなに幸せだろうと思うようになってきました。

それだけではありません。九巻全部を読み終った時には、『塩狩峠』、『聖書講義』という素晴らしい本に出会えたことを心から喜び、これからも聖書の学びを続けていこうと決心するほどに考え方が変えられていました。

それから三〇年、今もその時の気持ちは変わらず、毎日一章ずつ読み続けています。

新約聖書からの始まり　横山　美佐

はじめて聖書を手にしたのは、中学三年の時、教会へ連れて行ってくださった女性から手渡された時です。新約聖書でした。

当時の私は『旧約』があることさえ知りませんでしたが、『新約』のみことばは暗唱できるようになりました。

『肉体にひとつの棘が与えられている』とのパウロのことばは、弱さを持っている者として深く共鳴できました。

特に読み込んだのは、愛の章、コリント人への第一の手紙十三章の『愛は寛容で慈悲あり、愛は親切です。人をねたみません。愛は高ぶらず誇りません』箇所でした。

小学生の頃は、クラス委員に選ばれるほど人に好かれる者でしたが、実際は妬み、やっかみに駆られやすく、自分より能力のある人、きれいな人、可愛い人に会うと、陰で悪口を言ったりしていました。

五〇歳を越した私が、長い間心の病を負い、この先に不安を持った時、必ず励ましとなるみことばは、エレミヤ書二九章 11 節です。

『わたしがあなた方に対して抱いている計画は……平安……将来と希望を与え…るもの』

聖書を読み心養われる日々もとうに三〇年が過ぎました。これからも導きを求めます。

◎あかし作品集◎

【春夏秋冬】出版！

クリスチャン・ペンクラブ関東の会員が書き合った、七主題による１５０篇余りの作品が満載されています。ぜひ、ご覧ください。

二〇一〇年の『花鳥風月』・二〇一二年の喜怒哀楽』に続くシリーズ第三弾です。

お求めは、お知り合いの会員、または事務局(1ページに記載)へご一報ください。

定価　一冊一〇〇〇円＋税（送料無料）

A六版　二一五ページ

【余滴】

「聖書は、あなたにとってどんな書物ですか」と問われたら、何と答えるでしょうか。以下は世界の著名人たちの応答です。

★私が獄につながれ、ただ一冊の本を持ちこむことを許されるとしたら、私は聖書を選びます。（ゲーテ）

★私の生涯に最も深い影響を与えた書物は聖書である。（ガンジー）

★私が毎日、もっとも愛読する書物、それは聖書です。私の辞書に【悲惨】という文字はありません。（ヘレン・ケラー）

★聖書はただの書物ではない。それに反対するすべてのものを征服する力を持つ生き物である。（ナポレオン）

★聖書を教えない単なる教育は、無責任な人に鉄砲を渡すようなものである。

セオドア・ルーズベルト（米国大統領）

★聖書の存在は、人類がかつて経験したうちで最も大きい恵みである。その価値を減らそうとのいかなる企ても、人類への罪悪となる。（イマヌエル・カント）

★今、自分は一生をふりかえってみると、何も誇るようなものはないが、ただ札幌において数カ月の間、日本の青年たちに聖書を教えたことを思うと、すこし満足と喜びを感じる。

（ウイリアム・クラーク・「少年よ大志を抱け」の一言で有名）

★神と聖書なしに、この世を正しく統治することは不可能である。

（ジョージ・ワシントン・米国大統領）

★聖書を読むこと。そのことが教育である。（テニスン）

私たちも自分の答えを用意しておきたいものです。いつでも証しできるように。（三浦）

編集後記

▼『文は信なり』は、創立六〇周年を機に２５号でリニューアルしてから今回で３１号になりました。回を重ねるごとに《あかし文章を書き、伝える》ＪＣＰの使命が色濃く表れてきています。神様の導きを強く感じ感謝します。今回は、聖書を神のことばとして愛読するようになるまでの、神様の一人一人への働きかけを中心に編集しました。

時は間もなくクリスマス。この一書を通して、聖書の語る『恵みとまことに満ちる神』イエス・キリストの教会へ導かれる方が起こされるように祈ります。（Ｋ・Ｍ）

▼異常気象で季節感がなくなりそうな昨今ですが、時は確実に進んでいきます。テーマが決まり呼びかければ、速やかに応じてくださる書く仲間がいます。個性も表現も、バラエティに富んだ内容だと自画自賛です。いつも楽しみながら編集して、伝道への道備えに励みたいと、願っています。（Ｙ・Ｓ）